

# あいづち的発話によるターンの受け継ぎの変化

学籍番号 所属・学年

## 1. はじめに

S13 (アルファベット・漢字表記)

この論文の目的は、大学院のゼミの談話におけるターンの受け継ぎの表示について、ターンとして認められないあいづち的な発話の定義と意味の究明によって明らかにすることである。ターンというのは、とある発言者がしゃべり出した瞬間から話が終わるまでの時間だと定義されることが多い。そしてターンの受け継ぎは前述のような行為の連続だと考えられる。

ゼミを必修科目として扱っている(大学名)大学に在籍する留学生はまだしも、欧米教育みたいに積極的な発言や質問を求めない日本の大学で勉強している留学生の多くは、学術的な討論もしくは「日本らしき」グループ談話の進め方に詳しく接触することがなかなかできないのではなかろうか。ターンの受け継ぎを分析することによって、普通の日本人らしい適切な言葉選びと発言のタイミングを学ぶことができるようになり、学術の場においても恥ずかしがらずに聞き手と話し手の役割をスムーズに進めて行く能力を身につけられると考えられる。しかし、ターンの受け継ぎを極めるためにはまずターンとして認められない「あいづち的な発話」の定義をはっきりさせる必要があると思う。従って、本文ではそれぞれのあいづち的な発話の背後に含まれた意味を判明することがターンの受け継ぎにどのように影響しているのか、について考察して行きたいと思う。

## 2. 先行研究と本研究の位置づけ

大学院のゼミの談話におけるターンの受け継ぎについて扱った研究は中井陽子(2003)『言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示』や賈琦(2008)『小集団討論場面における話者交替の日中対照研究』、張麗(2010)『話者交替にみられる中国人と日本人の「自己主張」のスタイル：小集団ディスカッションを通して(その2)』などがある。

中井は、日本語母語話者三人の会話を文字化し、それぞれのターンの受け継ぎ表示(ターンの開始、終了、受取、譲渡表示など)の時に用いられている言葉遣いと体の動きや視線などの非言語的行動を分析し、ターンの受け継ぎ表示の各段階に現れやすい行動と言語的要素をまとめている。また、賈琦は、中国語母語話者と日本語母語話者の二つのグループの話合いの内容を同じく文字化し、各内容がターンの受け継ぎ表示のどの部分に当てはまるのかを分類し、日本人と中国人のそれぞれのターン取得状況を比較してみたている。張麗は日本語ができる中国人と中国語がしゃべられる日本人を集め、日本語と中国語での会話に両方参加させ、日本人と中国人の自らターンを取ろうとする時の積極性(張麗はそれを「自己主張」と定義している)を観察し、中国人と日本人の「自己主張」のスタイルの違いを分析している。

しかし、大学院のゼミの談話を対象に、あいづち的な発話がターンの受け継ぎに与える影響という観点から扱った研究はない。そこで、私はあいづち的な発話の前後にある本来の話

し手の発話内容に注目し、その間に挟んであるあいづち的発話の談話中における意味を考察していきたい。

### 3. 研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015年9月に神奈川県三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの40分程度の談話二つを文字化したものである。

一つは、8人の談話参加者が『(研究発表タイトル)』の研究発表に対し、約42話し合っていたものである。文字化した資料は、聞き手が各国の絵本事情の違いについて質問しているところを中心に記録してある。

もう一つは、日本語学習者が感じた困難点についての発表から因子項目を抽出し、よく理解できない部分を複数の聞き手が発表者に向けて41分にわたって質問をしていた時のやりとりである。

そして、その文字化データからターンの受け継ぎの観点からデータを抽出し、あいづち的な発話の定義と意味によって分析を行った。

### 4. 分析の結果

#### ※ グループA

- ① 質問者A1「ま、この、テーマとしてはね(発表者A:はい)、その日本の昔ばなしみたいなものも多読ライブラリーにも(発表者A:はいはい)あって、こちらにも入っていると思うんです(発表者A:はい)けども、その辺をどう捉えたら、  
発表者A「うーん、違い、  
質問者A1「いいのか。」  
発表者A「みたいな感じ」
- ② 質問者A1「で、あ、基本的にはあの一、作品としては翻訳ものではなくて、日本人作家が書いたもの、  
発表者A「あ、翻訳混ざってます。  
質問者A1「入っているんですね↑。」
- ③ 質問者A3「(間:2秒) すいません。あの一ちょっと、話をもっと簡単な方に戻っちゃうかもしれないんですけども。ええとー、インタビュー、学習者としてのインタビューは韓国語を学習している方にも、  
発表者A「したんです、はい。  
質問者A3「インタビューしてるんですね。それも論文には活かしていく。こう、」
- ④ 質問者A3「韓国語学習のものは入れてもいいとは思いますが、ちょっと気になったのはその、韓国語で、の絵本の作り方と、日本語での絵本の作り方が同じなのかどうかっていうことと(発表者A:うーん)、あとは、多分韓国語は全部ハングル(発表者A:はい、そうです)ですよね、漢字とかはもう↑。」

発表者A「ないです。」

質問者A3「使ってないですよ。で、あの、さっきのお話だと（発表者A：はい）、日本語だと漢字（発表者A：漢字）仮名交じりの方が（発表者A：はい）全部ひらがなよりは読みやすい（発表者A：はい）という意見もあったということなので、その辺がちょっと、言語の違いによって、その、文字の種類の違いとか（発表者A：はい）こう出てくると思うので、ま、そこをこう留意した上で、あの、韓国語学習者の方のデータも入れ（発表者A：はい）、ないといけなかなと思ったのと、後は、単純にあの、日本語学習者のほうに韓国人の方のデータがあると裏表で（発表者A：あーはい）おもしろいかなと思ったんですけど。」

※ グループB

- ⑤ 質問者A3「いや、あの（発表者A：はい）、たぶん最後の構成とかを見ても（発表者A：はい）、まず、絵本が言語学習に有効だよっていうことを言った上で（発表者A：はい）、で、日本語学習の時にはどういう絵本がいいんだろうね（発表者A：あ、はい）って話で進めていくってことだと思うので。」

発表者A「はい。そうしたいんです。」

質問者A3「その、ま、最初の絵本が有効だよというところを言うためには（発表者A：はい）、あの一」

発表者A「多言語になっても大丈夫ですか↑。」

- ⑥ 質問者B1「で、さらにこれから、ま、回収して、（発表者：はい）いく一、ところで、また、その、因子の項目（発表者：そう）とかも変わってくる一」

発表者「変わってきます」

質問者B「し、たぶん名前も、その、ちょっとまた、集まった、その項目によって（発表者B：はい）違ってくると思うんですけど（発表者B：はい）。確かに、その第三因子の17、20番と17番はちょっとこう、違うものが入っている」

「あいづち」は一般的に「特別の意味が含まれていない発言」を指しているが、「うーん」「はい」「そうですね」などが一番良く例として挙げられる。しかし、研究者によってその定義が変わってくるのは珍しいことではないのをまず理解して頂きたい。主観的だと思われるかもしれないが、本文では筆者である私が考えたあいづち的な発言に基づいて考察して行きたい。この二部の資料の中でターンの受け継ぎに関わる部分がとても多く、普通の会話の中にもよく出てくるあいづちは後にし、上記二グループのやりとりについて考察していきたい。

まずグループAの下線が引いているところに注目して頂きたい。①の「うーん、違う」は質問者A1の話の切断し、発表者Aがこれから新しいターンを始めようとしたが、質問者A1がその後すぐに切断される前の内容を補足したところから、発表者Aの発言は一つのターンとして成立できず、あいづちの範囲には入るだろう。②の「あ、翻訳混ざってます。」や③

の「したんです、はい。」、④の「ないです。」の後に、発表者がターンを取ろうとはしない。うえ、本来の発言者である質問者たちが切断される前の内容について補足するのではなく、関連する内容を引き続き発言し始めることから、質問者と発表者の両方とも発表者Aの発言は話し手の内容に対する同感を示すものであるとして理解している。よって、②③④の発言はいずれもあいづち的な発話であることは言えるだろう。

次にグループBを考えてみたいと思う。「はい、そうしたいです」や「変わってきます」などの発言は前述した先行研究の定義によると、「実質的な発話」ではなく、いわゆる「あいづち的な発話」に分類されている。私もそのような短い発言はターンに構成できるほどの要素を持っているとは考えていないが、それがただのあいづちだとも思わない。斜体になっているところを見れば分かると思うが、二人の質問者のいずれにおいても新しいターンの最初に切断された内容を重複する傾向が見られている。要するに、本来の話し手が自分の発言が聞き手の新しいターンによって切断され、その後にもまたターンを取って自分の考えを改めて伝える必要があると認識していた。従って、⑤⑥はあいづち的な発言より、一層深い意味が含まれる発話であることは言えるだろう。

最後になぜ上記の違いが両グループに現したのかについて考えていきたいと思う。グループAとグループBの質問者側の発話を観察して見ると両者の間には大きく異なるところが一つあると分かった。質問者が疑問文という形で自分の発話を終わらせようとする時に、発表者が突然割り込んできたのがグループAにおいて多く見られる。このようなやりとりによって質問者自身の求めている情報を早くも入手でき、その後の発話においては割り込まれる前の内容を重複する必要がなくなったと推測できる。一方、質問者が自身の見解や最終的な質問内容に関する情報を述べる最中に、発表者が割り込んできたところがグループBの最も大きな特徴である。発表者の発話は質問者の話の内容と関連するようには見えるが、あくまで予測に基づいた応答であり、それが必ず質問者の問題を解決できるとは限らない。従って、質問者はその後に切断された内容を再び強調し、自分の考えをはっきりと伝える傾向がある。

ターンの受け継ぎの分析結果は個人のあいづち的な発言に対する理解によって左右される。グループAとグループBの発表者における発言はどちらにしても一見あいづちに近い短い反応に見えるが、実際に分析したうえ、異なる結論が出てきた。あいづちであるかどうかを判断する時は単に発言に含まれる意味で結論を付けるのではなく、談話の前後を分析する必要もあると考えている。

#### ※ 参考文献

- I. 賈琦(2008)『小集団討論場面における話者交替の日中対照研究』『世界の日本語教育. 日本語教育論集 18』、pp.73-94
- II. 張麗(2010)「話者交替にみられる中国人と日本人の『自己主張』のスタイル：小集団ディスカッションを通して(その2)」『大正大學研究紀要. 人間學部・文學部』、pp.100-116
- III. 中井陽子(2003)「言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示」『早稲田大学日本語

教育研究 3 』、pp.23-39